

吉田悦之氏は、まず士清(1709(宝永6)年2/26～)と宣長(1730(享保15)年5/7～)とに年齢差が21歳あることから説き起こし、次に、士清さんの『日本書紀通証』が先に書かれ、その第一巻付録にある「倭語通音」を京都遊学中の宣長さんがそれに注目して「頗る発明有り」として書写したのが宣長26歳の時。さて本論は「士清さんを調べる面白さ」。特に1773(安永2)年～1774年《士清65歳～66歳》の往復書簡には年齢差にも拘らず、国語学上の情報や知識を披露しあい、資料となる書物を貸し借りする間柄になっていったことをわかりやすく説かれた。例えば安永2年2月5日の宣長書簡では、士清の『和訓栞』の節略刊行案を否定し、『栞』の序文のことがすでに出ている。士清さんが、後半生の大著『倭訓栞』を仕上げている途中の稿本とも言える段階で宣長さんに(栞)を見せたり、逆に宣長さんが『古事記伝』の稿本を蓬萊尚賢を通して貸したりしていること。自分の意見を率直に述べ、是は是非は非とする学者同志の付き合いであったこと。『古事記伝』の最初の読者は士清さんであり、未刊行の『栞』(倭訓栞)の最初の読者は宣長さんだった。版本の倭訓栞の序文は確かに宣長の文「栞播旨書(しおりぶみのはしがき)」であるが、文字は龍草蘆かとの指摘。

2. 9月13日(金) 13:30～15:10 アストプラザ4階会議室 29名参加(一般12)

講演:「『和訓栞』見出し語の分割と語釈の削除」—清逸本から製版本へ—

講師:三澤薫生氏(和洋女子大教授・和訓栞研究の第一人者) (概要を抜粋)

『倭訓栞』は内容の節略(見出し語並びにその語釈)をもって刊行されたが、これら一連の作業は、必ずしも節略=削除に終始していたわけではない。中には語釈を分割し、他編(中編・後編)に振り分ける節略の方法も採られていて、結果として本居宣長の忠告「節略ハ御無用ニ奉存候」(安永2年2月5日付谷川士清宛本居宣長書簡)をそのまま受け入れた形も存するのであるが、語釈における節略の全体像については、これまでほとんど触れることはなかった。……という前置きで始まり、(二 朱の符号は削除箇所を示す 四 朱の符号は谷川士清の付したものと結論付けておられる。少なくとも節略のための符号の大半が「あ」行から「か」行までによって占められ、しかもそれが『倭訓栞』の凡例が書かれる前に付せられていたという事実から想定されている。また、節略が、士清が生前に手掛けた語義の相違などを中心に不必要な語釈を整理した朱点のあと、三編に分けるのを前提に前編に不必要な方言語彙を整理したという二段階の節略の形跡がある。

資料《河北影楨(士清小伝では「景楨」を使用)筆、谷川清逸書写『倭訓栞』稿本34冊(石水博物館蔵)》

3. 9月20日(金) 9:30～12:00(10時に津新町駅集合で、士清関係史跡案内) 2班 19名(一般9)

* 11月24日(日) 新町フェスタ参加。士清生誕300年の時の旗を立て、机を置いてくじ引きも。延8名協力。

特別役員会 1月11日(土) 9:30～ 年度末役員会。新築の馬場幸子代表宅にて兼初釜茶会。

新年会 1月26日(土) 錫杖湖畔「湖水荘」で。

11:30～14:00 19人出席(右写真 撮影:佐野)

津新町・津駅への送迎バス利用。自己紹介などなごやかな雰囲気の中で抱負を語りあった。

* 小学校出張講座(今年は出足が悪かったが、1月や2月にも要請があった)(詳しくはp6)

10/28 新町小学校4年3クラス 12/12 養正小学校4年

2/20 安東小学校4年6年 2/24 櫛形小学校4年



新年会 錫杖湖畔

<平成25年度中の交流会・研修会等参加状況> まとめ:山下孝治

一. みえ歴史街道津地域推進協議会

① 25年4・23(日) 第1回ボランティアガイド研修部会

② 6・16(日) ボランティアガイド現地研修会(久居藩城下めぐり)

③ 7・16(火) 総会

④ 8・1(木) 歴史講演会「水は命」講師;浅生悦生氏

⑤ 8・31(土) 歴史講演会「銅鐸の謎」講師;浅生悦生氏

⑥ 26年1・21(火) ボランティアガイド研修交流会(美里社会福祉センター)

⑦ 2・17(月) 役員会

()内は参加者

(馬場・佐野)

(中津・佐野・山下)

(山下・山本)

(佐野明・谷口・松田・山下)

(梅原・奥田・谷口・中津・

馬場・別所・山越・山下)

(馬場・佐野・山下)

(山下)

二. おもてなし三重ボランティアガイド連絡協議会

26年2.23(日) 北勢中勢伊賀地区交流研修会(大黒屋光太夫記念館他) (奥田・佐野ま・別所・山越・山下)